

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月26日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520324

研究課題名（和文） 18世紀ドイツ語圏における言語論の系譜

研究課題名（英文） Genealogy of Thoughts on Language in the 18th Century Germany

研究代表者

宮谷 尚実（MIYATANI NAOMI）

国立音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：40384503

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀ドイツ語圏における言語論の諸相を明らかにすることを目的とした。その際に、18世紀プロイセンの思想家ヨハン・ゲオルク・ハーマンの言語に関する著作を中心に扱った。ハーマンにおける「へりくだり」概念を軸として、言語の起源、音声や文字、文体、また翻訳といった、言語のさまざまな側面を系譜的に記述することに努めた。通常の言語思想史であれば、時代ごとや著者ごとの特徴づけを行う。しかし、そのような方法は採らず、ハーマンを中心としつつ、クロップシュトックやズュースミルヒやヘルダーやカントなど同時代人との思想的対決をテーマごとに跡付けていくことで問題を系譜的にたどった。このようにして、これまでの言語思想史の枠組みを再検討し、また新たな視座を提示することに努めた。

この問題の探求のために、これまであまり日本では顧みられなかったハーマンの翻訳概念にも言語コミュニケーションという観点から着目し、特にヘルダーとの比較においてこれを調査・研究した。それにより、より幅広い枠組みで啓蒙時代の言語論の一断面を明らかにすることができた。

最後段階では、これまでの研究を総括的にまとめ『ハーマンの「へりくだり」の言語』と題して知泉書館より刊行した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to investigate various aspects of thoughts on language in the 18th century German speaking area observed mainly in Johann Georg Hamann's works on language, paying special attention to an important theological term "Herunterlassung", the divine act of condescension, in Hamann's writings. This makes possible to a better understanding of the diversity of the concept of language in the age of Enlightenment. The results of this research were already published under the title "Hamann's Language of Condescension" (Chisenshokan, 2013).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ドイツ文学、言語論、言語思想史、翻訳論、ハーマン

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、18世紀ドイツ語圏における言語論の諸相、特に言語学的記述を中心とした従来の近代ヨーロッパ言語論研究からは十分に注目されてこなかった、あるいは切り捨てられてしまっていた言語論の系譜を明らかにすることであった。私はこれまでの研究において18世紀のケーニヒスベルクで主に活動した思想家ヨハン・ゲオルク・ハーマンの著作における言語コミュニケーションの形式を、ハーマンの中心思想である「へりくだり」の思想との関連で分析してきた。これは、キリスト教において「神のへりくだり」に基づく思想で、神がへりくだって人間の次元へと降りてくることをいい、神が人間に理解できるように語ること、聖霊を通して人間に聖書を記させること、さらにはイエスという人間の姿にまで化肉することなどにみられる。人間に対する神のこうした「へりくだり」の関係を、ハーマンは人間同士の言語コミュニケーションに適用して、対話の相手の思考と理解の次元に自らへりくだって、降りていくことを求める。私はこれまでの研究において、ハーマンにおける「へりくだり」の思想と彼の著作にみられる文字や書簡形式との関連に照明をあて、ハーマンの言語観、特に音声と文字との関連、さらに書簡性という概念で表されるハーマンのコミュニケーション戦略を、「へりくだり」の思想から解明してきた。ハーマンに関する研究は国内外で神学、文学、哲学と多角的に進められているが、文献学的に精緻な手法を用いつつも現代にも通じるコミュニケーション論に重点をおいている点に独創性のある本研究を3年間で更に発展させていくことを、以上の背景のもとに行うこととしていた。

2. 研究の目的

本研究における主たる鍵概念は「翻訳」であった。最近でこそ翻訳学という学際的な学問領域が認知されてきたが、従来は翻訳が言語学習の文脈あるいは技術論の範囲を越えて考察されることは稀であった。言語学や哲学の記述法を越えて言語論の文脈で翻訳論を跡づけることは、さまざまな言語の交流の中で生きる現代の我々にとっても有意義なことである。

そこで、『美学提要』において「語ることは翻訳である」と定義するハーマンの翻訳概念の特色に、その言語論との関連で着目することとしていた。古典やルターにおける翻訳論や同時代人であるヘルダーやアプトやレッシングを始めとした啓蒙主義の作家たちとの比較のみならず、シュライアーマッハ

ーやノヴァーリス等のロマン主義やその後現代に至るまでの翻訳論との関連を明らかにすることが本研究の目的である。

まず1年目では、ハーマンの翻訳概念を文献学的に丹念に調査検討する予定とした。この概念は決して一義的には使用されていないため、スペクトルの極めて慎重な分析を要する。2年目には、他の作家たちの翻訳論との比較対照によって18世紀の言語論の全体像の中での翻訳論の系譜を概念的に解明することとしていた。3年目にはルターやそれ以前の翻訳論にも遡及し、さらに現代の言語論や、ようやく基礎づけがなされてきた現代の翻訳学との関連で18世紀の言語論の位置づけを明らかにすることを目的とした。そこでは近代ヨーロッパにおける「理性」や「普遍主義」の限界と、それらに対して批判的な立場をとったハーマンの言語論の有効性が明らかになるという仮説を立てていた。

翻訳といえば、おもにラングのレベルでの二言語間における翻訳を指すが、ハーマンの形而上学的「翻訳」論を再構成する作業を通せば認識と言語との関連や、言語と音楽等の諸文化活動との関連も、異文化コミュニケーションや広義の翻訳の地平において読み解くことができるのではないだろうかと推測した。ハーマンの言語論が現代の言語や文化を理解する上で持ちうる意義と有効性を探る本研究の視座は、翻訳理論研究における狭義のトランス・テキスト性への関心に留まらない、より広範囲の射程をもった領域横断的研究を可能とすると考えた。

3. 研究の方法

本研究は、従来の言語論や翻訳論では顧慮されてこなかった、いわゆる「伝統」から見れば傍流とされる部分を掘り上げようとする試みであるため、個々の著作の成立背景や時代状況を含め、文献を精査する必要がある。さらに、言語論の枠組みを批判的に検討し、その問題性を指摘するためには、従来の研究成果を踏まえるだけでは足りず、全体像を丹念に組みあげていく作業を要する。以下、年度ごとに予定していた研究方法を記す。

(2010度)ハーマンの翻訳概念を読み解く上で重要ないくつかの著作や往復書簡に関してドイツの図書館等に所蔵されている資料にもあたり、文献学的に精度の高い調査を行う。ミュンスター大学のハーマン・アルヒーフ、バイエルン州立図書館(ミュンヘン)、ドイツ国立図書館(ベルリン)に所蔵されている手稿の複写版や自筆書き込みのある初版本は、現在入手できる全集で見落とされている重要な情報を提供する可能性がある。著

作ではロマン派にも大きな影響を与えた『美学提要』や、古典文学をテーマとした著作『ヘレニズム書簡のクローバー』などを中心に、調査・吟味をする。本年度には、5月に予定されているゲーテ協会のシンポジウムでパネリストの一人としてハーマンの翻訳論に関して口頭発表の予定。ここでは、他のパネリスト諸氏によって報告される翻訳論の歴史におけるハーマンの翻訳概念の位置づけを試みる。9月末には、4～5年に一度開催される国際ハーマン学会に参加し、ハーマンの書簡に見られる翻訳概念に関する研究を発表の予定。そこで神学、文学、哲学等、さまざまな学問領域でハーマンを専門とする各国の研究者とハーマンにおける翻訳の問題に関する議論を行い、以後の研究に生かす。

(2011年度) 18世紀から19世紀にかけてはドイツ文学において他国の文学の受容が顕著な時期であり、翻訳をめぐる言説が自国語ひいては言語そのものへの意識を高めることになった。この時代のヘルダー、アプト、レッシング、ゲーテ、シュレーゲル、ノヴァーリスといった作家たちの翻訳論との関連で、翻訳論と言語論との関連性についての研究を深める。特にヘルダーに関しては『断想集』等の著作のみならず、ハーマンらとの私的書簡において見られる、ある共通の作品をめぐる翻訳論によって、それらの差異がより明確になることが期待される。

(2012年度) 聖書の翻訳によってドイツ語による文学の基礎をなしたルターやそれ以前の翻訳論にも遡及し、さらにベンヤミンの言語論や、現代の文化学や異文化コミュニケーション論の諸領域を考慮にいれつつ、18世紀の言語論、特にハーマンの翻訳論の位置づけを明らかにする。翻訳とは、単なる言語の移し替えにとどまらず、異文化とのコミュニケーション行為である。翻訳については原作の言語表現からの「自由」か「忠実」か、という二項対立が永遠の課題として頻繁に語られるが、ルターの流れを汲むハーマンの「へりくだり」のコミュニケーションによる言語論を援用すれば、この対立関係を克服するヒントも得られるはずである。それにより、従来の言語思想史や実証的文献学の枠組みによっては記述されてこなかった側面から、西洋近代における翻訳論や言語論の限界と現代における有効性を検証する。本年度には、全体の研究成果を出版物の形にまとめる予定としていた。

4. 研究成果

(1) 18世紀ドイツ語圏における言語論の諸相を、翻訳論を中心として考察することが2010年度の研究計画であった。

特にハーマンにおける翻訳概念に関し、以下の2つの視点から調査研究を実施した。①

ドイツ語圏のみならずヨーロッパにおける翻訳史の文脈におけるハーマンの位置づけ。②ハーマンの著作活動における翻訳活動と翻訳概念との関係とその変遷。①については、5月に開催された日本ゲーテ協会のシンポジウムにパネリストの一人として参加し、ヘルダーやシュライアーマッハーの翻訳論の背景としての翻訳概念を主にハーマンの著作『美学提要』から読み解いた。初版本と全集版との比較検討を通して、従来の研究では見落とされていた、この著作のタイトルと翻訳概念および解釈概念との関連性を指摘した。このシンポジウムでの発表内容やそこで見えた課題を踏まえ、夏には18世紀関連の蔵書の豊富さで名高いヴォルフエンビュッテル図書館での文献調査を実施した。その成果は、9月にドイツ・ハレ大学で開催された国際ハーマン学会で発表された。ヨーロッパにおけるハーマン研究では翻訳概念にあまり関心が向けられないが、それゆえにハーマンの著作のみならず、ハーマン自身の翻訳活動との関わりから翻訳概念がはらむ可能性を読み解く試みには意義があったと考えられる。この発表に関するフロアからのコメントと議論によって、ヘルダーの翻訳論との関連で新たな知見を得ることができた。今後の研究につながる重要な成果である。

(2) 2011年度には、前年度に実施した調査研究を進展させ、ハーマンにおける翻訳論に関し、さらに18世紀の作家・思想家における翻訳論との比較を進めた。

前年度秋の国際ハーマン学会における口頭発表の内容を深め、その議論の場で特に指摘されたヘルダーの翻訳論との比較を集中的に行った。国際ハーマン学会における発表原稿を加筆修正し、記録論文集に寄稿する準備も進めた。前年度までに収集できた文献の整理分析も進めつつ、ドイツのその他の図書館での調査および文献収集も継続する予定であった。今回はテュービンゲン大学とコンスタンツ大学の図書館において文献の調査収集を行った。ハーマンは起点言語から目標言語へと至るあいだのプロセスに着目し、思想内容を読み手が自分の言葉で理解しようとする営為に「メンタル・翻訳」の概念を用いたが、ヘルダーはこの概念を自分の翻訳論へと敷衍して、起点言語によって書き表された内容を目標言語による「翻訳」へと固定化しまう前の「メンタル翻訳」が最高の翻訳だと位置づけた。両者の共通点は、翻訳された状態をいわば完成品として見ていない点、オリジナルテキストの模造品を目標言語でやることを目標とせずむしろ疑問視している点、翻訳作品ではなく目標言語によるさまざまな解釈の可能性を孕んだ「翻訳行為」のプロセスを重視する点だろう。この「メンタル翻訳」という概念をハーマンやヘルダーと共

有するならば、翻訳者の使命は、「起点言語と目標言語の間での宙づり状態」のいわば訳語未決定の領域にある意味内容を、元の固有性をできるだけ失わせないまま、目標言語のなかであるひとつの単語や表現へと創造的なかたちで固定させていくことだと言えることがわかった。この「メンタル翻訳」概念を軸とした翻訳理解は、いずれ現代のガダマーの翻訳観にもつながることになる。当年度の研究は、ハーマンにおける「メンタル翻訳」概念を中心とした18世紀言語論をテーマとしていた。これについて、予定通り日本独文学会の秋季大会での発表を行った。

(3) 2012年度には、これまでの研究をまとめ、単著の研究書『ハーマンの「へりくだり」の言語論』（知泉書館）として出版することができた。

結果的に、18世紀のドイツ語圏言語思想の文脈において、ケーニヒスベルクの著作家ヨハン・ゲオルク・ハーマンの著作における言語コミュニケーションの形式を、翻訳論も含めて「へりくだり」の思想との関連で分析した研究となった。人間にたいする神の「へりくだり」の関係を、人間同士の言語コミュニケーションに適用して、対話の相手の思考と理解の次元に自らへりくだって、降りていくことをハーマンは求める。本書では、ハーマンにおける「へりくだり」の思想と彼の著作にみられる文字や書簡形式との関連に照明をあて、特に音声と文字との関連、書簡性、翻訳という概念で表されるハーマンのコミュニケーション戦略を、「へりくだり」の思想から解明した。こうした研究は、日本のハーマン研究をはじめ、さまざまな領域の研究に新たな視点を提供するものとして意義あるものである。特にハーマンに関する研究は、国内外で神学、文学、哲学と多角的に進められているが、文献学的に精緻な手法を用いつつも現代にも通じるコミュニケーション論に重点をおいて研究を進めた本研究の意義は大きい。本書により18世紀ドイツ語圏における言語論の諸相、特に言語学的記述を中心とした従来の近代ヨーロッパ言語論研究からは十分に注目されてこなかった、あるいは切り捨てられてしまっていた言語論の一面を明らかにする、という本研究の目的はまず一旦果たされたと言えよう。

(4) 今後の展望は、本研究で得られた「メンタル翻訳」に関する知見を大幅に発展させ、18世紀ドイツ語圏における「沈黙」の諸相に関する研究である。このテーマは、これまで国際的にも国内でも未踏の分野であり、日本とドイツとの文化比較という観点からも非常に重要な研究となることが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①宮谷尚実、ハーマンにおける翻訳(報告)、国立音楽大学研究紀要、査読無、第45号、2011、73-75

②宮谷尚実、ハーマンにおける翻訳、通訳翻訳研究、査読有、第11号、2011、5-13

〔学会発表〕(計3件)

①宮谷尚実、ハーマンにおける翻訳、日本ゲーテ協会シンポジウム「ゲーテ時代の翻訳思想 - 理論・実践・受容 -」、2010年5月28日、東京ドイツ文化センター

② MIYATANI NAOMI、Hamanns Übersetzungs-begriffe im Spiegel seines Briefwechsels、第10回国際ハーマン学会、2010年9月23日、ハレ大学(ドイツ)

③宮谷尚実、Mentalübersetzung - ハーマンとヘルダーにおける翻訳観の一断面、日本独文学会秋季研究発表会、2011年10月16日、金沢大学

〔図書〕(計1件)

①宮谷尚実、知泉書館、ハーマンの「へりくだり」の言語、2013、278

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮谷 尚実 (MIYATANI, NAOMI)

国立音楽大学・音楽学部・准教授
研究者番号：40384503

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：